

## McTaggart のテーゼ: 「時間の非実在性」の真の意味

宮原 勇

以下では J. Ellis McTaggart(1866-1925)の論文 “The Unreality of Time”<sup>(1)</sup>(1908)を分析する。彼は、ヘーゲル哲学の「ひたむきな解釈者であり擁護者」と呼ばれており、哲学上の立場は観念論(Idealism)である。彼の時間論はこの 1908 年の論文と、1921 年と没後 1927 年にかけて刊行された *The Nature of Existence* において展開されている。本論文では 1908 年の論文の時間論のみを扱うこととする。本論文は 1908 年の論文の「逐語的」分析となっているが、McTaggart の、この論文が、前世紀から今世紀にかけて、英米哲学の時間論において批判されてきたという経緯を踏まえ、そもそも McTaggart が The Unreality of Time というテーゼでもって何を言おうとしたかを解明しようとしたものである。ヘーゲリアンとしての McTaggart の議論は、本質的に実在論的風土の中で集中的な批判を浴びてきたというのは、理解できるが、問題はそのような風土の中でそもそも彼の議論が正当に理解されてきたかという問題がある。私見では、特に彼の論文のタイトルにある「非実在性」という概念の持つ意味自体にも問題があると思われる。

実在論者にとって「非実在性」という概念は、全くの無を意味するのであろうが、Idealist にとっての Unreality という概念は、無ではない。「非実在的」であっても、しっかりとした現実性(Actuality)、つまり Wirklichkeit を有することもありうるのであり、時間の非実在性といっても、まさに Idealism における時間と主観に関する positive な主張なのである。

### 1 A 系列と B 系列

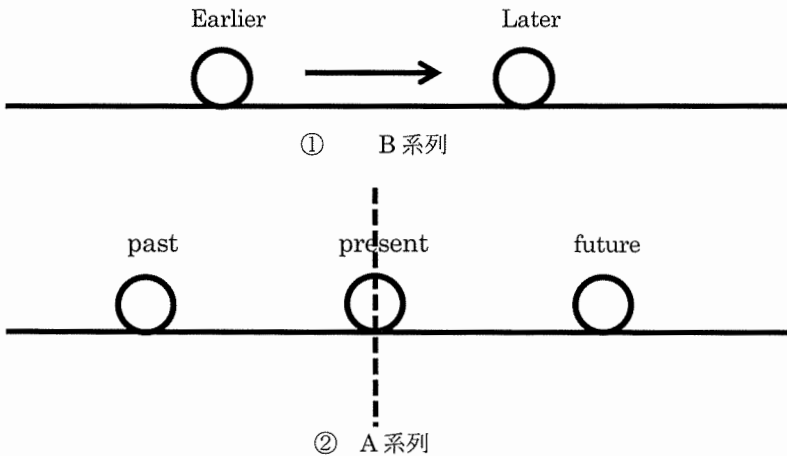
彼によれば、「時間位置」(positions in time)は次の二通りの仕方であらわれに現れるという。すなわち;

- ① Earlier – Later
- ② Past, Present, Future

McTaggart は、この二通りの関係の内、前者を B 系列、後者を A 系列と名付けている。

McTaggart によれば、①の B 系列は不変的(permanent)であるが、②の系列の方が、時間にとって、より本質的で、基本的関係であるという。しかし、それは[実在の対象に妥当するという意味で]客観的であるわけではない。それというのも、そもそも時間自体が非実在的(unreal)だからである。この「時間は非実在的である」というのが、McTaggart の証明すべき根本的テーゼである。A 系列とは、McTaggart によれば、the far past→the near past→the present→the near future→the far future へと走る位置の系列であるのに対し、B 系列は、earlier→later へと走る系列であるという。

そして、McTaggart は、時点と出来事を次のように定義する。すなわち、「時間位置」は、瞬間(moment)であり、一つの時点での内容は、複数の出来事(events)から成る。一つの同一の時点において、複数の出来事が同時に生起することの可能性を確保しておくのである。



## 2 A 系列の優位性

McTaggart によれば、われわれは時間の中の出来事を、それが現在である(being

present)として知覚し、かつわれわれが直接に知覚する出来事はそれだけであるという。認識において、知覚がその直接性ゆえに優位に立ち、そのような認識作用がまさに「現在」において生起する限り、現在生起する出来事を認識しうる認識作用は「知覚」のみ、ということになる。それに対して、われわれが記憶か推理でそれらが実在であると信ずる出来事はみな、過去か未来である。現在より以前の出来事は過去と見なし、現在より以後の出来事は未来と見なす。知覚、記憶、推理という三つの認識様態の区別が時間の三様態に対応すると考えられている。さらに、現在があくまでも基準となり、前後と過去、未来が成立するので、A系列とB系列が形成されるという。

しかし、A系列はわれわれの精神の永続的な幻想に過ぎず、時間の実在的本性は、純粹に物事の前—後関係としてのB系列の区別しか含まないように思われるが、McTaggartの見解では、A系列こそ時間にとって本質的であるという。A系列こそ時間にとって本質的である、という意味は、時間関係の生成には何よりも「現在」という特異点の成立が必要であり、そこの関係で前後関係や、過去、未来という概念が成立するからである。それに対して、B系列は永続的であるがゆえに、本質的な変化という要素は含んでいず、時間関係の源泉にはなりえない。

### 3 変化と自同性

McTaggart がいうには、一つの出来事はそれが一旦生じたからには、ひとつの出来事であることをやめることはない。いったんNがOより前であり、Mより後として生起したからには、その関係が変わることはない。その意味では、以前と以後という秩序自体は永続的である。ということは、Earlier – Later だけから時間が成立していると、変化はないということになる。やはり、時間の中で生起するものにとって重要なことは、変化しうる出来事があるということと、その出来事が同じでありうるということである。つまり、変化するということと、出来事の同一性の保持ということが重要なのである。

いずれにしても、McTaggart は、時間の中の出来事のすべての変化は、その特徴が性質であれ、関係であれ、A系列の中でのプレゼンス(現出)によって出来事に属することとなった特徴(character)の変化にすぎないという。

#### 4 時間的特徴は性質なのか関係なのか

それでは、時間的に移り変わる事物や出来事を「時間の中にある」ものとして性格付けている特徴は、性質なのか、それとも関係なのだろうか。もし、その特徴が性質であり、その性質がその出来事なり、対象なりにとって、本質的であれば、そのような出来事の時間的性質が変化してしまえば、それは同じ出来事とは言えなくなる。となると、時間が変化しても当の物事の同一性が保持されねばならないという要請は否定されてしまう。

また、その時間的特徴が、物と物との外的関係であるとしても、Y への X の関係が、Y への関係性という性質を有する X の中に存在するとしたなら、関係性がどちらかの事物の内在的性質となり、その場合、出来事は同じではありえない。時間規定とは、関係性であるとしても、それはあくまでも X や Y の内属的性質であってはならない。過去の出来事が変化するとしても、以前その出来事がそうであったよりもより一層、現在から遠くであるという、ひとつの観点からのみ変化するのである。

#### 5 時間規定が非実在的である必要性

McTaggart は次のように推論する。

時間が<非実在的なもの>と仮定しよう(私はそのように信じているのだが)。そうすると、「時間の中の出来事は、A 系列の中のそのポジションという観点で[のみ]変化する」と認めたとしても、「何かが実際に(really)変化する」ということを認めることにはならないだろう。

ということは、<A 系列がなければ変化はないだろうし、しかも時間は変化を含んでいるので、B 系列自体は時間にとっては不十分である>ということになる。

そもそも、現実には、なんらかの永続的關係があっても、それだけでは時間にはならない。変化しないのだから、時間關係は生じない。B 系列自体は永続的關係にすぎない。A 系列による規定が付与されてはじめて時間が生ずるのである。McTaggart は、現実に見出せる不変的關係のことを C 系列と名付けている。基本的には任意の空間

的配列をいつているにすぎない。単に、M、N、O、Pといった配列である。これだけでは、B系列にはならない。その中に変化の不可逆性が介入することで、はじめてB系列になる。B系列はC系列とは違って方向が規定されている。方向(direction)がなければB系列にはならない。例えばMを中心と考えるとNはそのすぐとなりであり、OはNより遠いという関係は、Nを中心と考えるとMもOもすぐとなりとなる。右行きなのか左行きなのか区別がなくシンメトリーである場合は、不可逆ではない。つまり、Oが真中である場合には、Mはそのすぐ隣であるということになり、Mが中心である場合には、Oは隣となる。しかし、方向性が付与されて左方向が「より以前」、右方向が「より以後」を指すとすると、MがOより以前という関係が逆転することはない。線形的関係においては、必然的に方向は二つあって、しかもそれしかない。

## 6 A系列が究極的である理由

これまでの議論を要約しよう。

- ・ A系列とB系列とは時間にとっては共に本質的である。
- ・ しかし、両者は同程度に基本的であるわけではない。
- ・ 過去、現在、未来というA系列が究極的であり、他の概念から導出される派生的概念ではない。A系列は記述できるけれども、定義はできない。

B系列は究極的ではない。つまり、他の要素から導出できるということ。

C系列という永続的な関係の系列が与えられているとする。それはそれ自体時間的なものではない。だからC系列はB系列ではない。このC系列がA系列を形成するとすると、それはB系列にもなることになる。その系列は過去から未来へという方向で並べられる。

それに対して、C系列はA系列と同様に究極的である。時間を構成するユニットは、線形的秩序、つまり系列を形成している。しかもそれは、現在であるか、過去であるか、未来であるかどれかである。一方、時間を構成する各ユニットは他のユニットより前であるか、後である。この前後関係は究極的ではない。時間的前後とは、線

形的配列+方向で生成する。ただし、現在、過去、未来という規定は、線形的配列+方向、つまり線形的前後関係につきるわけではない。それとは別の要素が必要である。

McTaggartによれば、変化と方向を与えるA系列と永続性を与えるC系列とから、B系列は生成するという。正確には、方向+C系列=>B系列であり、方向はA系列によって与えられる。以上のようにいずれにしても、A系列、つまり過去、現在、未来という区別は時間にとって本質的であり、それがなければ時間規定は意味をなさない。しかし、それらの区別が実在に対して真ではないとすると、つまり妥当しないとするとどうなるだろうか。つまり、A系列が実在性の規定ではないとするとどうだろうか。当然、A系列が実在的な規定ではないとすると、時間自体には実在性はない、つまり時間とは非実在的な事象であるということになる。

## 7 証明の端緒

A系列がなければ時間は存在しえないということを証明した。そこで、実際にA系列は存在しえないことを示し、従って時間は存在しえない、ということを証明する必要がある。

McTaggartの用語では、「実在的」(real)であるということは、「存在」(exist)しているということである。もっとも、この場合、存在するということは、実体(substance)として存在する必要はなく、個体、つまり実在的実体の属性や実在的關係であっても、実在的に存在するといえる。さらには、事実的出来事の特性や出来事間の關係であってもよい。

さて、A系列のタームは出来事(event)の特徴である。というのは、各出来事について過去であるとか現在であるとか、未来であるとかと言う。時間の各瞬間を分離し、それぞれ現実だとし、それらを過去、現在、未来という。

## 8 A系列は關係なのか性質なのか

そもそも時間の三つの特性(characteristics)とは、關係(relation)か、性質(quality)かどちらかである。McTaggartによれば、A系列が關係だとしても、性質だとしても、矛盾するという。

## 8.1 A 系列が関係の場合

その場合、それぞれの関係の項のうち一つだけが、出来事が瞬間である。他方は、時間系列の外部にある何ものかであればならない。

というのは、A 系列の関係は、変化する関係であり、しかも時間系列に属する項と項との関係は変化しないのであるから、時間系列の外部にある何ものかであればならない。時間の瞬間 [目盛りのようなものか]がその中で起こっている出来事と分離した現実であるとする、出来事と瞬間との関係は変化しない。それぞれの出来事は、未来、現在、過去においても、同じ瞬間のうちにあ

る。

A 系列を形成している関係とは、出来事や瞬間と、時間系列の中にはそれ自体では存在しない何ものかとの関係である。[A 系列が生成するためには、出来事間の並列的關係からだけでなく、絶えず特定の方向へと<移行していくもの>と<移行しない基準>の双方がなくてはならない]

過去、現在、未来という規定は互いに両立不可能である。つまり、ある出来事、ないしは瞬間がある時点で同時に過去であり、現在であり、未来であるということとはできない。

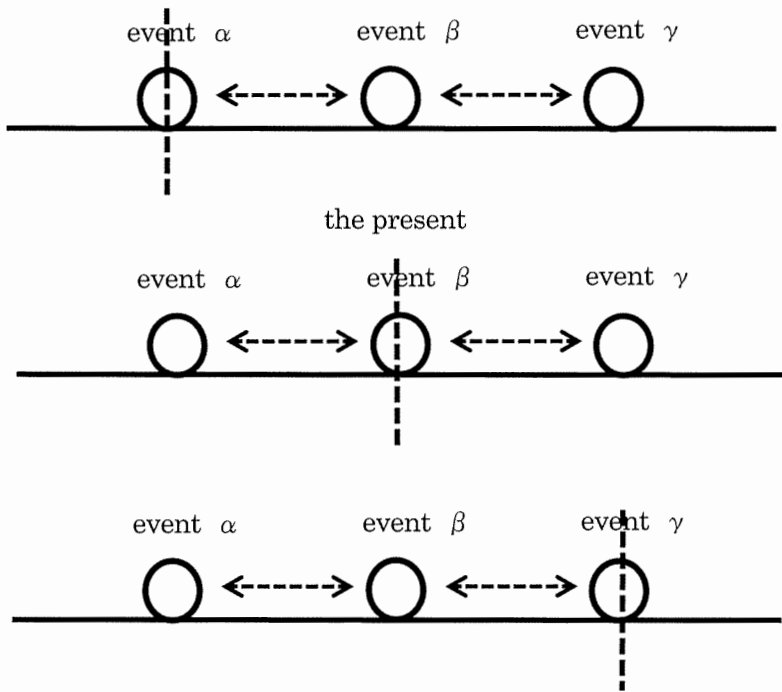
それは現在であり、未来であったし、これから過去になる。

(...that it is present, has been future, and will be past)

当該の出来事は、その現在(the present)において現在であり、過去(the past)において未来であるし、未来(the future)においては、過ぎ去ってしまったことになる。

ここで、McTaggart の議論の中に、定冠詞付きの the present という表現が登場し、その時の、つまり発話時のまさにその現在が指し示される。この現在が後に出てくる the specious present である。

次ページの図は、8.1 の関係説の図である。



## 8.2 A系列が性質の系列とした場合

A系列の変化は、性質の変化であるとした場合、その性質というのは、出来事の性質なのだろうか。

そこで、McTaggart は、経験 M という概念を導入する。

- ① 経験 M の予期(anticipation)
- ② 経験 M それ自体
- ③ 経験 M の記憶

といった状態が異なった性質を持つとする。

これは、

未来の M(未来時点で起こるだろう経験)



現在での M(現在起こっている経験)

過去の M(過去時点で起こった経験)

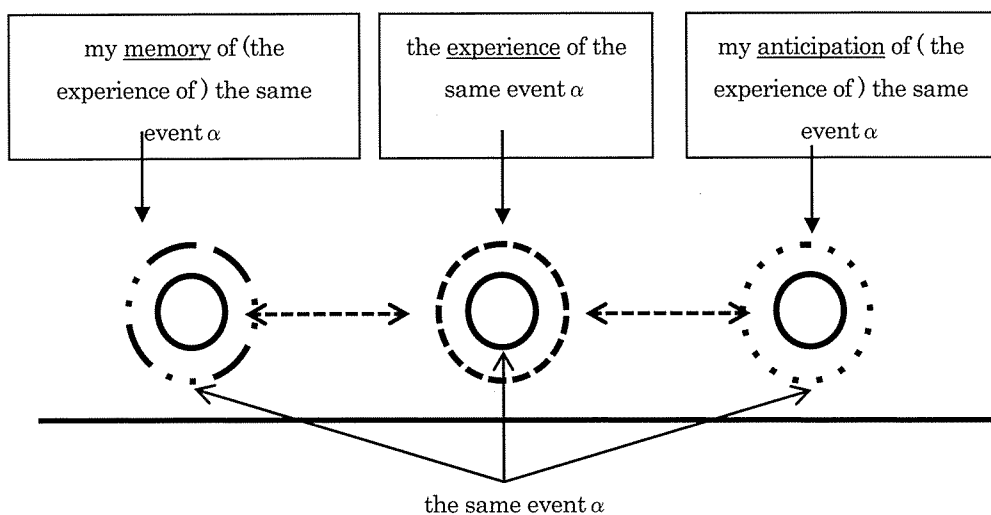
といったものが異なった性質を持つということではない。

三つの別々な出来事が異なった性質を所有し、同じ一つの経験 M 自体とその予期、そしてその記憶が、それぞれ、未来、現在、過去である。

この事実は、A 系列が性質の変化であるという見解を支持するものではない。

参考図を描くと下記ようになる。

event は同じで、下線部だけが変化する。つまり、the same event について経験された状態が現在から過去へと変化するのであって、event の性質の変化ではない。



## 9 暫定的結論

結論: A 系列を實在に適用することは矛盾を含む。A 系列は實在に関しては、当てはまらない。しかも、時間は A 系列を含む。したがって、時間は實在に関しては、当てはまらない。

われわれが時間の中に何かが存在すると判断するときは、いつも誤りを犯していることになる。そして、われわれが何らかのものを時間の中に存在するも

のとして知覚するときはいつも、われわれは、それを際には存在しないものとして知覚しているのである。

McTaggart のこの「結論」は、われわれに「実在」や「存在」に関する観念の変更を迫るものであり、時間的なものは「非存在」であるという見解を帰謬法で証明しようとするものである。つまり、生成をしない<無時間的存立>こそ「存在」であるというパルメニデスのテーゼを否定するものと見てよい。

## 10 A 系列の起源

出来事が過去、現在、未来へと区分されうると考える理由は、われわれの経験の内部の区別に由来する。

いつでも私は何らかの知覚を有し、[同時に]他の何らかの知覚についての記憶を有し、さらにまた他の何らかの知覚についての予期を有する。直接的知覚自体は、性質上、記憶や予期とは異なった心的状態である。次のような信念はこのような事実に基づいている。すなわち、知覚自体は、私が実際に知覚しているときには、ある特定の特性をもち、私が記憶とか予期をもつ場合には、[知覚の時とは]別の特性と入れ替わる。そのような特性が、現在性(presentness)とか過去性(pastness)とか、未来性(futurity)と呼ばれるのである。

これらの特性の観念を持っているから、われわれはそれらを出来事に適用するのである。

私がいま有している直接的知覚と同時なものはすべて現在と呼ばれ、たとえひとりも直接的知覚を有する者がいなくとも、現在があるかのように考えられさえする。---過去や未来に関しても同様である。

しかし、過去、現在、未来という区別の全体に関するわれわれの信念の起源は、知覚と知覚についての予期と記憶との違いにある。

つまり、McTaggart は、過去、現在、未来という区別は、出来事自体の区別では

なく、それを経験する知覚、記憶、予期という認識作用の特性の違いにすぎないという。

## 11 循環論法

＜直接的知覚は、私がそれを有しているとき、現在である。つまり、直接的知覚を特徴付けるときに「現在」という概念を使用する。そして、直接的知覚と同時のものはみな、現在であるという。つまり、今度は「現在」のものを定義するときに、「直接的に知覚されたもの」という＞。これは明らかに、循環になっている。

私が現在有している直接的知覚は、私の「見かけ上の現在」(specious present)<sup>(2)</sup>において遂行されるのである。そのような「見かけ上の現在」の中には入らないものについては、私は記憶か予期しか持つことはできない。そして、「見かけ上の現在」は、状況によってその長さが変化する。しかも、同じ時期にあったとしても二人の人の間で違うことがありうる。そして、まさにそのような直接的な知覚が遂行されるのが、その現出する特別の現在なのである。したがって、上記の循環とは、直接的知覚と、私の「見かけ上の現在」とが不可分な関係にあることを示唆しているのである。

## 12 McTaggart にとっての最終的結論

A 系列としても B 系列としても、どちらでも時間は現実に存在しない。しかし、これは、複数事物からなるの無方向的並列という C 系列が実在する可能性を残している。

A 系列はそれが首尾一貫しないゆえに否定された。そして、この否定は B 系列の否定も含意する。しかし、C 系列にはそのような矛盾は見出せなかった。A 系列が実在性に妥当しないからといって、C 系列に妥当しないわけではない。

そもそも、時間や変化を「現象」に還元し、現象にまつわる規定だとすれば、それでは、変化するものや時間の中にあるもの自体、つまり変化しながらもそれ自体として同一性を保っているものを、変化・生成する＜現象＞に還元することはできない。とすると、永続的で不変な事物とその不変なる性質やそのような事物間の永続的關係は、そもそも時間の中にはないことになる。あるいは、時間の中に落とし込むことは

禁じられていることになる。とすると、時間自体は、結局はそのような実在とは一切かかわらない事柄ということになり、実在的なものなのではないことになる。McTaggartはこの問題を将来の課題として残している。

### 13 議論から取り出される洞察とさらなる展開

以上の McTaggart の議論から取り出される洞察と、それを基礎にさらに展開できる帰結を下記に述べる。

1. 時間概念にとって、過去、現在、未来という枠組みは本質的な規定であるが、その枠組み自体、そのつどの出来事(event)間の相互関係で説明がつくものではない。つまり、過去、現在、未来という三つの時制概念は、時間的出来事間の相互関係に解消される概念ではないということである。
2. 過去、現在、未来といった「変化」は、出来事の内容が変わるという性質の変化ではない。過去、現在、未来とは、ある内容的に同一の出来事が、未来であったものが現在となり、過去となるというモードの違いであり、内容自体が変化するものではない。
3. A 系列は、出来事についての<認知>の仕方の違いに対応している。つまり、認識主観の存在が前提されていないと成立しない特性である。あるいは発話者によるそのつどの発話自体に関係づけられた規定である。その意味では、原理的にまったく脱主観的に規定することはできない。
4. 同一の出来事が「未来」から「現在」に移行し、「現在」から「過去」へと移行するというのは、動かないA系列の枠が設定されているからこそ、可能である。つまり、移行、ないしは変化というのは不変な枠組みを前提としている。というのも、出来事の移行と共に枠組みも同時にスライドしていったら、未来はいつまでも同じ内容の出来事が続くであろうし、現在もまったく同じ出来事になってしまうからである。移行、変化は静止、不変の枠組みを前提としている。これは、アプリアリな要請である。
5. A 系列の「現在」を規定するのは、the specious present であり、それは出来事が、知覚作用を通じて認識主観としての意識へと現出することであ

る(appearing)。the specious present とは、出来事が自らを意識へ向けて presenting することである。このことを言い換えれば、「現前」ということになる。物事が、何らかの主観へと現前することが、まさに現在のその現在性を規定しているのである。

6. 複数の事物の無方向的な空間的線形配列(C 系列)に方向性が付与されると前後関係付きの線形的配列(B 系列)が成立する。ということは、B 系列の成立には、移行や変化は必要ではないということである。その意味ではまったく客観的な規定であり、A 系列の有する主観的な本質とは、まったく異なる規定である。客観的実在論者は、時間の根源を B 系列、さらには C 系列に還元しようとするが、まったく変化のない静止した状態の記述になってしまう。
7. 線形的配列には、方向性は二つ考えられる。(1)の方向は、未来から出来事がやって来るといふ、未来から過去へと向かう方向である。つまり、同一の出来事に注目してみると実際に現在において知覚される以前には、これから起こるのではないかと予測され、それが実際に現れ、そして記憶の底に消えていくという方向性が考えられる。(2)の方向は、われわれが現に生きている、この「現在」が B 系列の客観的事例上をなめらかに過去から未来へと滑るように移行していくという方向性である。
8. 出来事の実質的内容から形成されている現実の表象世界は、未来から湧き出してくる<現象>の川の流れるようなものとしてイメージ化されうる。われわれが直面しているこの現実は、それぞれの出来事からなっていて、その出来事は、主語があり動詞がある文として表現されうる。動詞がある以上、時制に支配されていて、なんらかの時間規定が為されている。出来事とは、ある時間間隔において、特定の個物が主体として、移動したり、変化したり、何ものかに働きかけたりすることをいうが、それは「現象」(appearance)としてそれ自体、主観内の表象(representation)でもある。
9. 上記 7 における(2)に関しては、われわれ認識主観が乗っている the specious present の「船」は、見かけ上は時間の川を上流に向かって、進んでいるようにイメージされうる。川の水自体は、われわれがそのつど経験している具体的事象であり、上流としての「未来」から現在へと向かっ

て流れてくる。われわれ、認識主観が乗っている船は、なにか固定したものの、川のメタファーを使うと、川底であったり、川岸であったりといった静止した目印に対しては、泊まっていることもあり、または上流か下流に進んでいっていると考えられる。ただ、下流に水の流れと同じ速度で流れていくとまるで時間事象が変化しないように感じる。

10. 上記9の場合で、「船」が静止している場合が考えられていた。その場合、the specious present は「立ち止まる今」(nunc stans)であり、変化や移行に対しての不動の基準として認識される。その場合、出来事の経験内容自体が移行し、過去方向へとスライドしていくことになる。
11. 上記のイメージにおける船と川との関係は相対的であり、川を前後関係付きの方向性を持っている線形的配列(B系列)とみなし、しかもそれ自体は変化しないものとして固定すると、A系列を生成させる原点、あるいは零点(null point)としての the specious present は、その川を上流方向に向かって進んで行く「船」と見なせるのである。
12. 時間の中で到来し、過ぎ去りつつある出来事を、川を流れる<水>に喩えると、the specious present 自体は、絶えず現在として固定され、変わらない基準として A 系列を生成させていると言える。それは船というよりも、川に架かっている固定した「橋」のようなものであるとも言える。メタファーとして「船」であろうと、「橋」であろうと、移行し変化する事物にとって超越している存在が考えられなければ、時間概念は成立しないと見える。
13. 時間的規定としての「いま」や空間的規定としての「ここ」が、そのつどの認識作用、ないしはそのつどの発話作用を指示していることは、原理的に否定しようがないが、それがそのつどの作用を遂行している遂行主体(認識主体であれ、発話主体であれ)としての「私」を指示している、ないしは帰着せしめられると言えるかどうかの問題が生ずる。McTaggart の主張は、結局、「私」としての主観にまったく関係のない規定としては、時間規定は成立し得ず、もし脱主観的客観性を「実在性」と呼ぶとすれば、時間とはそのような「実在性」を意味するものではないことを述べているのである。しかし、逆説的には時間規定は、ある意味では「現実性」

(actuality)を有しているのであり、それはまさに経験の reality を保証しているものであり、そのような時間の reality を、脱主観的客観主義の立場から捉えようとしても、結局は「非実在性」というテーゼしか出てこない。ということは、帰謬法的に考えれば、そもそも脱主観的実在論の立場自体が不適切であるということになる。

以上

## 註

- (1) J. Ellis McTaggart, The Unreality of Time, *Mind*, Vol. 17, No.68, 1908, pp.457-474.
- (2) “specious present” という概念について。『リーダーズ英和辞典』第2版での訳語。「現象する現在」。もともと E.R. Clay が、「われわれの直接的な経験の事実」をそう呼んだことから使用されてきた。O.E.D. によれば、appearing to be actually known or experienced という意味という。W. James も言及している。William James, *The Principles of Psychology*, Vol.2, 1890, 1950, Dover Publications, Inc., p.609, 613. William James は、the specious present について次のように述べている。「実際に認識される現在は、ナイフのエッジではなく、馬の鞍のような形をしていて、それ独自の一定の幅をもっている。われわれはその鞍に腰をかけ、そしてそこから二つの時間の方向を眺めるのである。われわれの時間知覚の構成の単位は、『持続』である。それはいわば、船首と船尾を有している、つまり後方の端と前方の端である。その両端が『繋がっている』という関係が知覚されるのは、両方とも、この『持続のブロック』の部分だからである。」 *Ibid.*, pp.609-10.